

まえがき

国際関係論を学ぶための基礎的な知識は何か。基本的な考え方には、どのようなものがあるか。本書では、このような問題を取り上げてみたい。

国際関係で、人間の生命と安全を重視し、その実現のために必要な基礎的知識をもつことを、ここでは「思考の作法」と呼ぶことにしたい。行儀や作法には、堅苦しくて、古めかしい面もあるが、行儀が良いことや、作法が正しいことは、「良い人間関係」をつくり上げていくうえで、とても大切なことである。このことは、国際関係についても、言えよう。

国際関係は、国家と国家の関係を中心とするが、国境を越える人間と人間の関係も、それに劣らず重要である。国家を構成しているのも、人間である。この関連で言えば、「良い国際関係」を考えていくには、まず、国際関係についての「思考の作法」を身につけることが、必要となる。これが、国際関係論入門の第一歩となる。

本書は、序章と5部20章から構成される。序章と各部に、日本を事例とするコラムをおく。各章の末尾には、「発展学習」の手引きをつけている。

序章「国際関係のイメージ：なにを、どのように見るか」は、私たちが一般に抱いている「国際関係のイメージ」を取り上げ、それを5つに類型化して説明する。その狙いは、どのイメージが正しいかを定めることではなく、私たちがどのような視点で、どのようなイメージをもっているかを自覚することにある。

第I部「世界システム：どのようにして、世界は1つになったか」は、15世紀末のコロンブスによるアメリカの「発見」と、ヴァスコ・ダ・ガマのインド到着以来、南北アメリカ、アジア、アフリカ、中東の諸地域が次第に、欧米の勢力のもとに組み込まれ、1つの世界システムとして形成されてきた歴史をみる。ここで論題となるのは、世界システムの形成(第1章)、東アジア世界の対

応(第2章)、植民地支配と植民地の独立(第3章)、世界システム論でのヘゲモニーと覇権国(第4章)である。

第II部「国際システム：国家間の関係は、どのようになっているか」は、近代国際関係の原理としての西欧国際体系と、その基本単位の国家と民族を取り上げ、さらに近年のグローバル化をみてから、現代国際体系の特徴を整理する。ここでは、西欧国際体系(第5章)、主権国家(第6章)、民族・ナショナリズム(第7章)、グローバル化(第8章)、現代国際体系(第9章)の説明がなされる。

第III部「パワー・ポリティクス：軍事力は、誰にとって必要なか」は、アナーキーな国際社会で、各国が安全保障を追求し、その結果がパワー・ポリティクスとなることについて、国家の視点だけでなく、人々の安全の視点も加えると、どのように考えられるか、について考察していく。ここでの主要な論題は、国家の安全保障と人々の安全(第10章)、戦争とその犠牲を減らす方策(第11章)、および、事例として、米国がなぜ戦争を繰り返すか(第12章)である。

第IV部「経済発展：誰に有利で、誰に不利か」は、世界システムのもとの経済発展と貧困の問題について、考察する。ここでの主な論題は、アジア諸国の経済発展(第13章)、貧困と開発(第14章)、および、事例として、アフリカの貧困の検証(第15章)となる。

第V部「これからの世界：誰が、どのように新しい世界を創るか」で選んだ論題は、グローバル貿易における国際秩序(GATT・WTO・FTA)の意義(第16章)、人々の国際移動から見直した現代世界の意味(第17章)、現代世界におけるイスラームについての正しい理解(第18章)、現代における広義の平和運動の展開とその政治的役割(第19章)、および国連を中心とする平和構築の分析(第20章)となっている。

コラムでは、日本での国際関係論の誕生(序章)、世界システム論と鎖国(第I部)、西欧国際体系と脱亜論(第II部)、沖縄の基地問題(第III部)、1980年代の経済大国化(第IV部)、原爆と原発(第V部)について、取り上げる。

本書の冒頭には、国名などを一覧する地図を掲載し、本書の末尾には、国際関係論の学習で電子情報を得るためのウェブサイトのリスト、および本書での記述に関連する事項の年表を掲載しておく。

本書は、次のような視点を重視している。

第1に、「人間の視点」の重視である。このことは、本書全体の議論にも、あるいは第III部～第V部の副題「軍事力は、誰にとって必要なか」、「経済発展は、誰に有利で、誰に不利か」、「誰が、どのように新しい世界を創るか」にも表れている。

第2に、「歴史の視点」の重視である。そのことは、世界システムの形成や植民地支配・植民地独立についての歴史的考察となっている。これによって、例えば、中国・インドについて、500年前の先進国からの下降と、最近の上昇(復活)という視点や、かつては豊かであったアフリカ(とくにサハラ以南)における貧困の現状について、植民地支配の影響を問う視点をもつことができる。

第3に、「平和の視点」の重視である。日本では、国際関係論は、第二次世界大戦の惨禍への反省から出発した。これが、日本の国際関係論の原点である。しかし、国際政治の現実には、依然として、パワー・ポリティクスである。本書での視点は、パワー・ポリティクスの現実を前にしながら、戦争の発生を減らし、戦争の犠牲を減らす方策を探り、平和運動・平和構築という平和創造の営みを検証するものとなる。国家の安全保障が成立しても、人々の安全が失われたら意味がないことは、言うまでもないことである。

最後に、本書の執筆者の担当部分を紹介しておく。序章から第IV部までのうち、歴史的考察、理論的考察の部分は、編著者が担当した。第III部から第V部までで、現実の展開と将来への展望の部分は、日本の国際政治学界で活躍されている専門家の先生方に執筆をお願いした。ここで感謝とお礼の言葉を述べておきたい。

2012年2月27日

編著者 初瀬龍平